

any

ars nova yamaguchi

「エニー」

Spring 2023

APR.-JUN.

123

特集

許家維+張碩尹+鄭先喻

新作展「浪のしたにも

都のさぶらふぞ」



20th ANNIVERSARY

特集

03 砂糖でたどる
台湾と日本の近代

許家維 + 張碩尹 + 鄭先喻

新作展「浪のしたにも都のさぶらふぞ」

08 any 通信

- ①アーティスト 串田和美 (建築・演出家)
- ②お先に試写しました 「丘の上の本屋さん」 (監督: アラタキ・イロハシ・マツシ)
- ③展覧の窓 小林南水子 「生け雑草」
- ④映画と 「マイヤ・イツラ 旅から生まれるデザイン」パンフレット
- ⑤any music 川本高寿 「ピカピカ」

ピックアップイベント

09 山口情報芸術センター
第7回 未来の山口の運動会
—あつまれ！未来のスポーツ収穫祭
新しいスポーツが大豊作!!

ハイバイ「再生」
演劇史に残る怪作が生まれ変わる。

中原中也記念館
企画展「中原中也と関東大震災
関東大震災から100年。文学に与えた影響を探る。」

山口市民会館
特別講演名人会 三遊亭小遊三・林家たい平 二人会
落語の魅力をつまみと。

DRUM TAO 30周年記念「THE TAO 夢幻響」
究極のドラム・アート。

13 ストラディヴァリウス・サミット・コンサート2023

14 イベントカレンダー 4~6月
INFORMATION



日台たどる
近代の砂糖

《浪のしたにも都のさぶらふぞ》の撮影風景
(場所: 保門製糖) photo: 白澤哲浩



20th ANNIVERSARY

特集 許家維 + 張碩尹 + 鄭先喻
新作展「浪のしたにも都のさぶらふぞ」

6月より山口情報芸術センター[YCAM]で開催される台湾を拠点とする許家維(シウ・ジャウェイ)、張碩尹(チャン・ティントン)、鄭先喻(チェン・シェンユウ)による新作展は、台湾と日本の歴史や関係性を砂糖産業を起点に紐解く展覧会。同時に、YCAM 開館20周年記念事業の目玉の一つとしてVR、バイオテクノロジーなどYCAMが20年間で培ってきた知見や技術を結集した展覧会になるという。そんな壮大なスケールの展覧会について、現在制作準備を進めているキュレーターの吉崎さんにお聞きした。

台湾でそれぞれに 活躍している アーティストが 3人集まって 一緒に作る作品



台湾編(作品種)のワンシーン。

まずは今回新作と一緒に制作するアーティストの紹介をお願いします。

現在、許家維(シュウ・ジャウエイ)、張碩尹(チャン・ティントン)、鄭先喻(チェン・シェンユウ)という台湾の3人のアーティストと新作を作っています。それぞれ台湾で活躍しているアーティストですが、今回はその3人が集まって一緒に作品を制作しています。

許家維は国際的にも注目されているアーティストで、昨年開催された国際芸術祭「あいち2022」をはじめとして日本でもたびたび作品を発表しています。台湾の歴史あるいは自身のルーツをアジアの他の国々との関係史から辿るような映像作品を作っていて、そこでは従来の歴史の語りでは見過ごされてしまうような事象や個人の記憶に光が当たります。

張碩尹は、インスタレーションや映像作品、パフォーマンスなど幅広い表現活動を行っています。消費社会が与える社会的、生態的影響など社会政治的な主題を扱い、人間とテクノロジー、社会の

関係性について考察するような作品を作っています。最近では、恋愛シミュレーションゲームを用いた没入型作品やインタラクティブな映像作品をインターネット上に発表しています。

鄭先喻はアーティストとして活動しながら、同時にソフトウェア開発者としても活動していて、他のアーティストともよくコラボレーションをして作品を作っています。インスタレーションやパフォーマンス、バイオアート作品などを手掛けていて、人間の行動や感情、機械との関係性に注目したとてもユーモラスな作品を作っています。2021年に台湾の芸術賞「第19回台新芸術賞」を張碩尹とともに受賞し、今注目されているアーティストです。3人とも1980年代生まれで年齢も近く、普段からお互いの作品制作を手伝うこともあるようです。ただ、3人が共同で一つの作品を制作するのは、今回が初めてです。

どういう経緯でこの3人と一緒に作品を制作することになったのでしょうか？
彼らは2021年に本作の第1章にあたる《等

品播種》という映像インスタレーションを台湾で制作、発表しました。その作品の上映会とアーティストトークが2021年11月に北九州の門司であったので、親に行きました。作品自体とてもおもしろく、さらに日本統治時代の台湾における製糖業のことや砂糖が軍用燃料として研究開発されていたことにも興味を持ちました。トークで日本編を作る計画を知り、その制作に何らかの形で関わることができたらと漠然と考えていたら、翌12月にホーツェン(2021年にYCAMで「ヴォイス・オブ・ヴォイドー虚無の声」展を開催したシンガポールのアーティスト)から「YCAMとコンタクトをとりたいから紹介するよ」と連絡があり、作家の一人である許とつながってくれたんです。偶然にも彼らもYCAMと一緒に作品を制作したいと思っていてくれたようで、話を始めて日本編と一緒に作るようになりました。



《等品播種》展示風景(台湾現代文化実験場[C-LAB], 2021年)
photo: 齋 哲均

吉崎和彦 YOSHIZAKI Kazuhiko

1980年生まれ。2009年、東京都現代美術館に芸芸員として勤務。映像、写真、身体表現、音楽など様々なジャンルの展覧会を担当する。17年10月よりYCAMのキュレーターに就任。主に展覧会の企画を行う。

photo: 齋 廣弘



大日本製糖株式会社台湾支社虎尾製糖所の全景(撮影年不明)
国立台湾歴史博物館 OPEN DATA

台湾・虎尾と日本・門司の
それぞれで作品をつくるという
アイデアが生まれた

アーティストたちは作品を最初から2部構成で考えていたのでしょうか？

そのアイデアは初期の段階からあったようです。このプロジェクトのきっかけを作ったのは張で、彼の故郷である「虎尾」という街に日本統治時代に作られ、今も現役で稼働している製糖工場があって、張がこの製糖工場から虎尾や台湾の歴史を考える作品を作ろうと、許と鄭に声をかけたことがはじまりです。彼らがリサーチをしているなかで、虎尾の製糖工場を作った大日本製糖が運営していた製糖工場が日本の門司にもあり、今は関門製糖

として稼働していることを知り、虎尾と門司のそれぞれで作品を作るアイデアが生まれたと聞いています。

「砂糖」は今回の展覧会で重要な要素なのですね。

日本は台湾の統治時代に近代化政策を推し進め、その中で日本に砂糖を供給するために砂糖産業の発展に力を入れました。台湾の虎尾にある製糖工場は、戦後、運営する母体が大日本製糖ではなくなった今でも稼働している現役の工場です。作家たちにとって、製糖工場はある種の近代化の象徴でもあると捉えています。台湾で原料糖(粗糖)を作って日本に運んでいく、その行き先の一つが門司港だったので。門司の工場が白い精製糖になり日本各地に運ばれていきました。戦争末期、東南アジアから石油が運べなくなり、石油が手に入らなくなった日本は、戦闘機を動かすための代用燃料を探さなければいけなくなります。そこで注目されたのがサトウキビでした。サトウキビの汁を原料とし、発酵、蒸留を経てアルコール

を作り、それをガソリンに代わる燃料とする研究が戦時中進められました。実戦で使うまでは至らなかったようですが、その製造施設が虎尾にもあったために、街への空襲が激しかったそうです。砂糖が甘みを生むだけでなく、戦争のための動力としてなり得たということ、この砂糖の2つの側面が今回の展覧会のキーにもなっています。

展覧会名になっている「浪のしたにも都のさぶらふぞ」とは？

『平家物語』の中の一節を引用しています。今回日本編の舞台の一つである門司港は、関門海峡に面する港町です。関門海峡は、栄華を極めた平家がやがて衰亡の一途をたどり、源義経率いる源氏の軍勢に破れることになった壇ノ浦の合戦の舞台でもあります。この時、二位殿(平時子)はまだ8歳だった安徳天皇を抱いて海に入水します。その際、二位殿が幼い帝に言った言葉が、「浪のしたにも都のさぶらふぞ(波の下にも都がございますよ)」です。

甘みと戦争の
ための動力
砂糖の2つの側面が
今回の展覧会のキー

北九州門司・大里製糖所の全景(1907年) 提供: 鈴木商店記念館
虎尾の製糖所と同じく大日本製糖が運営していた。現・関門製糖。



台湾劇《等品播種》の映像のワンシーン。台湾の伝統的な人形劇「布袋戲」の上演と演劇、また現代音楽家によるパーカッション演奏も登場する。



パカスを燃やした黒い煙を擡っている
the chimneys looked like five incense sticks offered to Mazu the goddess.

YCAMが培ってきた テクノロジーも活かしていく

展示会ではどのような構成になるのでしょうか？

展示会では、《等品播種》と、展示会タイトルと同名で新作となる《浪のしたにも都のさぶらふぞ》を発表します。《等品播種》は、砂糖の結晶を模したジグザグの形をしたスクリーンに映像が投影され、その周りに砂糖や兵器にまつわるオブジェやロボットアームが配置され、映像とともに動いたり、照明が変化するなど無人劇のような上演型インスタレーションでした。今回の展示会では、その映像を中心にしたシンプルな展示にする予定です。本展のメインとなる《浪のしたにも都のさぶらふぞ》は、空間を大きく使って、映像プロジェクションとライブパフォーマンスからなる上演型のインスタレーションになる予定です。

《浪のしたにも都のさぶらふぞ》の映像では、文楽協会の人形遣いが操る文楽人形や、三味線の演奏、太夫の浄瑠璃、そして打楽器奏者による砂糖で作った楽器のパーカッションが登場します。さらに会場

では、VRのヘッドマウントディスプレイを装着したパフォーマーがパフォーマンスを行います。それ以外に、砂糖を発酵・蒸留して作るアルコールを使って、それを動力に展示の何かを動かすアイデアも検討しています。いままでYCAMが培ってきたバイオテクノロジーや映像技術、最近のホー・ツーニェンの展示会も含めてVRの技術を活かしながら、新しい表現を模索中です。

また、会期中は台湾の文化を紹介するイベントも多数開催します。国際的にも注目



日本劇《浪のしたにも都のさぶらふぞ》の制作風景。文楽人形を操る人形遣いたち。門司の関門製糖工場内に。

人形と 操る・操られる の関係性

されている台湾のインディーズ音楽を紹介するイベントのほかに台湾映画の上映会やトークイベントなど、台湾の文化を知ってもらい、さらに作品もより知ってもらえるような機会を作れるように準備を進めています。

photo: 山中慎太郎 (Sayumi)



提供: Hsu Chia-Wei Studio

許家維 (シュウ・ジャウウェイ)
HSU Chia-Wei

1983年台中生まれ。2000年代前半から、作品の発表や展示会の企画など精力的な活動を展開。従来の歴史に内包されない人間・物質・場所の関係を築いていくとあり、忘れ去られ、なおざりにされてきた物語を通じて、台湾を含むアジアの地理的、歴史的、文化的繋がりを示す作品を発表している。



photo: Choccat

張碩尹 (チャン・ティントン)
CHANG Ting-Tong

1982年台北生まれ。科学や生物学などの知識を元に絵画、パフォーマンス、映像作品を制作し、人間、科学技術、社会の関係性について考察してきた。台湾の近代を個人史の視点から描画する作品まで、多様なアプローチで現代社会の側面を切り取るプロジェクトを手がける。



鄭先喻 (チェン・シェンユウ)
CHENG Hsien-Yu

1984年高雄生まれ。ソフトウェア開発者、アーティスト、インスタレーションやパフォーマンス、ソフトウェア、実験的なパフォーマンスを手がける。人間の行動、感情、ソフトウェア、機械の間の関係性に重きを置いた作品を通して、社会と環境に対する独自の視点をユーモラスに表現している。

《浪のしたにも都のさぶらふぞ》で文楽人形などが登場するのはなぜでしょう？

人形は《等品播種》の映像の中にも登場します。作中で、台湾の伝統的な人形劇「布袋戲(ボテヒ)」により、日本の幕末を舞台に、鞍馬天狗という孤高のヒーローが新選組の近藤勇と戦う、大佛次郎原作の「鞍馬天狗」が元になった演目が上演されています。「鞍馬天狗」は台湾でも人気を博し、皇民化教育の一環として布袋戲でも上演されました。虎尾がある地域は布袋戲が盛んで、その土地に住む人々にとって馴染みのある人形劇の形式を用いて、虎尾の歴史を語るということが試みられています。

《浪のしたにも都のさぶらふぞ》では日本の伝統的な人形劇である「人形浄瑠璃」の形式を表現に取り入れています。本作では具体的な演目を上演するというよりは、人形と人形遣いの「操る・操られる」関係性により注目しています。さらに、VRアニメーションでも人形が登場し、それを「アバター」としてパフォーマーが操ります。こうした「操る・操られる」関係性が、日本と台湾、仮想現実と現実の関係性に重ね合わされ、誰が操り、

操られているかという問いかけられるものになるでしょう。

アジアのアーティストの 視点から、自分たちの歴史や 現在のことを考える

制作過程で、吉崎さんが発見したことはありますか？

あります。アーティスト3人の祖父の世代は日本の統治下で日本語を公用語(国語)として教育を受けた世代ですが、アーティストやその親の世代は、中国語を公用語として教育を受けています。また、台湾語を話す人も多く、家庭の中では中国語と台湾語が混ざって話されているとも聞きます。このように世代によって話す言語が違う、あるいは家庭内と外で話す言語が違うと知ったとき、私が当然と考えていたことが揺るがされました。日本では、地域によって方言はあるものの、基本的には家庭の中であろうと公の場であろうと同じ言語、日本語を話す。それが当然だと思っていたけれども、同世代の台湾の彼らにとってはそれが自明のものではない。そのことを知ったときに、「国語」とは

何なのだろう、「国」とは何なのかを考えさせられました。

2021年に招聘したホーの作品も、今回の台湾の3人のアーティストたちによる作品も、アジアのアーティストの視点から日本の歴史を考えるという点で共通しています。そのなかで感じるのは、彼らが歴史を単なる過去のものではなく、現在や未来を考えるために現在と不可分のものとして見ようとしている。彼らの歴史に対する向き合い方やその視点から私たちが学ぶことも多いと思いますし、改めて自分たちの歴史や現在のことを考えるきっかけにもなっていると思います。

許家維 + 張碩尹 + 鄭先喻
新作展

「浪のしたにも 都のさぶらふぞ」

2023年6月3日(土)~9月3日(日)
10:00~19:00

会場: 山口情報芸術センター スタジオA

【料金】無料



【人形浄瑠璃(にんぎょうじゆりぎ)】「浄瑠璃」とは、三味線の伴奏で「太夫(たゆう)」が物語を語る、日本の伝統的な芸能の一つ。15世紀中頃に生まれ、その後広く流行した牛若丸と浄瑠璃の恋物語の主人公の名前になんで「浄瑠璃」と呼ばれるようになる。浄瑠璃に合わせて人形を操るのが「人形浄瑠璃」で、太夫、三味線、人形遣いの「三幕」が幕を合わせて観覧する総合芸術。



●長時間パワフルに語り続けられるお2人とても元気でくれました。(真ピン子の「すぐ死ぬんだから」より)
●「夢と希望」を読んでみようと思えました。(テーマ展示「中世の本棚」— 日本文学賞より)
●それぞれの高いテクニクに裏打ちされたパフォーマンスだったと思います。(パフォーマンス「セレクション」より)
●自然を感じながらアート体験で新鮮でした。(展示「Forest Symphony」より)



公 益 財 團 法 人
山口市文化振興財団
Yamaguchi City Foundation for Cultural Promotion

